

平成 22 年 5 月 27 日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19300241
 研究課題名（和文） 幼老統合ケアに基づく世代間交流プログラムの開発と実践に関する総合的研究
 研究課題名（英文） Synthetic research on development and practice of intergenerational program based on children-elderly people integration care

研究代表者
 中井 孝章（NAKAI TAKAAKI）
 大阪市立大学・大学院生活科学研究科・教授
 研究者番号：20207707

研究成果の概要（和文）：本研究では、幼老統合ケア及びそれに基づく世代間交流の効果を、3年間にわたって大阪市内の特定地域での多世代交流会、高齢者と子どもの複合施設（宅幼老所）、地域住民の居場所、認知症高齢者施設において総合的に調査研究した結果、子どもは生活習慣や他者（特に、高齢者）への共感能力が身につく、高齢者は生き甲斐と自尊心が生まれるとともに、母親の子育て支援に対しても社会的祖父母力を発揮できることが実証された。

研究成果の概要（英文）：In this study, as the effect of intergeneration and exchange among generations based on it over three years, through intergeneration of an area in Osaka city, a complex facility which children and old men live together ("Taku-yourousho"), a comfortable place for inhabitants, and a dementia elderly-people institution, it turned out to be as follows. Namely, for the effect of intergeneration, a child got into habits of life and a sympathy ability to others (especially, elderly-people), while elderly-people could show their ability of child-care support for a person bringing up a child (especially, a mother), so-called "power of social grandmother and grandfather", including retrieving a reason for living and pride.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	6,400,000	1,920,000	8,320,000
2008年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2009年度	3,200,000	960,000	4,160,000
年度			
年度			
総計	13,600,000	4,080,000	17,680,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：生活文化、三世代共生交流住宅、共生ケア、街づくり、高齢者文化、子どもの居場所、回想法、富山方式

1. 研究開始当初の背景

現在、わが国は出生率の低下により子どもが減少するその一方で、高齢者が増加すると

いった少子高齢化社会を迎えつつある。少子高齢化社会は、将来の労働力を確保できない上に、激増する高齢者への扶養や介護で親世

代の負担が重くなり、近い将来、社会そのものが機能不全に陥ることが懸念されている。こうした状況を乗り越えるべく、政府は新エンジェルプラン、年金制度、新ゴールドプラン、介護保険制度等々、さまざまな打開策を講じているが、残念なことに、世代毎の生活問題への対処療法でしかなく、生活全体からみて文脈を欠いたバラバラのものとなっている。いま求められる少子高齢化社会の打開策とは、「子育て」、「家族の暮らし」、「高齢者の生活」を相互に関係づけ、トータルな暮らし方の変更をもたらすものではないかと考えられる。そこで、こうした将来の不安を払拭するために、新しい少子高齢化社会のビジョンとそれを裏打ちする社会保障理論を構築するとともに、その具体化として幼老統合ケアに基づく多世代交流（世代間交流）プログラムの開発と実践及び新しい生活文化の創造が喫緊の課題となると考えた。

2. 研究の目的

現在、幼老統合ケアに基づく世代間交流は、子ども世代、高齢者世代（前期・後期高齢者、虚弱・認知症高齢者すべてを含む）、親世代の相互交流及びその継続的組織化を通して教育効果と経済効果をもたらすものであるが、本研究ではこうした世代間交流を空間のスケール、すなわちマイクロ、メゾ、マクロの3つのスケールに類型化した上で、それぞれの実践状況を観察・測定・分析することにより、幼老統合ケア及び世代間交流の効果を実証することを目的とする。具体的には、3つのスケールごとの目的は、次のようになる。

(1) マイクロ・スケール

生活科学の立場から今日の子どもたちの生活時間、生活環境・状況、対人関係、特に高齢者とのかかわり状況や高齢者観等の生活実態について個々の小学生（特に、都市圏）

を対象に明らかにする。特に、子どもの生活スタイルの中で高齢者とのかかわりがどのような意義があるのかを解明する。

(2) メゾ・スケール

①「宅幼老所（三世代交流共生住宅）」と呼ばれる学童保育所と高齢者施設（老人ホーム）の複合施設の中で、子どもと高齢者との持続的な幼老統合ケアの成果、特に高齢者の認知面・行動面の改善から捉えることを目的とする。本研究は実際に、最先端の宅幼老所で幼老統合ケアを実践している施設に協力してもらい、その効果を明らかにする。

②大学周辺のK地区で小学校・保育所・自治会館・土地改良会館などを拠点に、研究グループと主任児童委員ならびにK区自治会や社会福祉協議会などが協力して、地域の子どもたち（乳幼児・小中高生）と高齢者が3年間、継続的に幼老統合ケアに基づく世代間交流会を実践し、その成果を子どもたちサイド、高齢者サイドから明らかにするとともに、世代間交流に適切なプログラムを開発することを目的とする。

③医師によってアルツハイマー型認知症と診断された高齢者に対して回想法を用いた幼老統合ケアによって参加者にどのような改善が生じたかについて解明する。

(3) マクロ・スケール

地域住民主体の街づくりのもと、その拠点を寺及びそこに付設された地域交流空間（愛称「おも路地」・駄菓子屋と児童文庫併設）における、地域の子どもと高齢者が教材（手製のおもちゃづくり、紙芝居、ベイゴマ等の伝承遊びなど）を介してかかわっている状況から世代間交流の意義を明らかにするとともに、研究グループ自らも実践プログラムを提案・実践し、その効果を検証する。

3. 研究の方法

(1) マイクロ・スケールの研究としては、前述

した目的のもと、主任児童委員や民生委員の協力を得て都市圏の小学生を対象に、アンケート調査を実施し、統計解析によってその状況を分析・解明する。

(2) メゾ・スケールの研究の各々は、次の通りである。

①宅幼老所における子どもと高齢者のかかわりを高齢者自身の変化（改善）を認知・行動尺度から分析する。子どもの改善面については、インタビューや観察を通して解明する。

②についても、上記(2)①と同様の手法で分析・解明する。

③M 市立 K 附属病院精神神経科を受診し、認知症高齢者 5 名（平均年齢 77.4 歳）に対して臨床心理学専攻の大学院生・学生と患者の子息がグループ回想法を通して幼老統合ケアを、約 1 時間のセッションを週 1 回の頻度で合計 10 回実施し、本実践の前後で認知症高齢者にどのような回想・発言の内容、すなわち改善パターンが見られるかについて、長谷川式認知症スケールと Mini-Mental State Examination という 2 つの評価尺度を用いて測定・分析する。なお、回想テーマとしては、自己紹介、人生で最初の思い出、小さい頃の遊んだ思い出……これからしてみたいことというように、幼年期より時系列的に回想を辿る野村豊子の手法を用いる。

(3) マクロ・スケール

「おも路地」における世代間交流の意義をここに集う大人へのインタビュー調査を行うことで解明する。

4. 研究成果

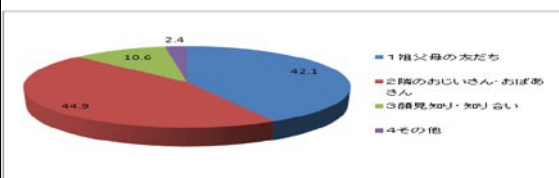
研究成果は、前述した研究の方法(1)～(4)に対応させながら、順次、論述する。

(1) ミクロ・スケール（今日の子どもの高齢者〔主に、祖父母〕とのかかわりの状況と高齢者観のみを提示）

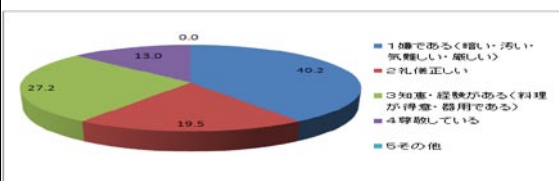
今日の子ども（小学生）たちが自分の祖父母や地域の高齢者との程度かかわりをもっているか、そして彼らはそうしたかかわりの中で高齢者についてどのようなイメージを抱いているかについて、都市圏の小学生、1703 名を対象に、アンケート調査を実施した結果、次のような知見が得られた。

今日の子どもの大半は、祖父母を構造的に排除した核家族で育つため、親しくしている高齢者がいる子どもが 1709 名中 541 名（31.7%）とあまり多くないが、半面、いると回答した子どもは祖父母の友だちや隣の高齢者と親しくしていることがわかった（グラフ 1）。また、子どもの高齢者観は、暗い・汚い・気難しい・厳しい等、嫌なイメージを抱いている者が、687 名（40.2%）と高いが、反対に礼儀正しい・知恵や経験がある・尊敬していると回答した者も、1022 名（59.8%）と高い（グラフ 2）。しかも、高齢者とかかわりのある子どもは、そうでない子どもと比べると、ポジティブな高齢者観を抱えていることがクロス集計から判明した。さらに、高齢者との交流の希望については、遊びが 551 名（32.2%）と最も多く、次いで生活・学習が 433 名（25.3%）と多かった（グラフ 3）。交流の希望についても、普段、高齢者とのかかわりのある子どもの方がそうでない子どもよりも、積極的であることがわかった。

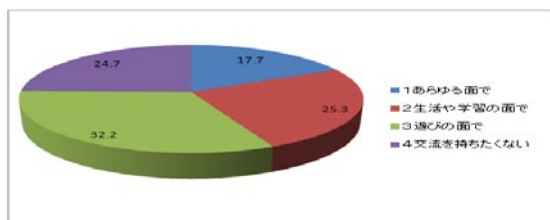
グラフ 1 親しくしている高齢者



グラフ 2 高齢者に対するイメージ（高齢者観）



グラフ3 高齢者と交流したいこと



(2) メゾ・スケール

① 宅幼老所における高齢者と子どもとの継続的な交流（幼老統合ケア）

学童保育所と老人ホームが合体した、ある複合施設において子どもと高齢者が相互交流した結果、次のような知見が得られた。

認知面及び行動面に対するフィールドワークと評定の結果、子どもと一緒にかまどでご飯炊きをしたり、料理づくりをした上で一緒に食べたり、ゲーム等で遊んだり、散歩したりすることにより、認知面（記憶力、思考力、想起力など）及び行動面（生活習慣力、実行力、コミュニケーション力など）の両面において向上がみられた高齢者が 22 名中 13 名 [59.1%]（顕著な者は 6 名 [27.3%]）、交流前後で変化がなかった高齢者が 1 名、反対に、状態がかなり悪化した（マイナス効果の）高齢者が 5 名 [22.7%]（顕著な者は 2 名 [9.1%]）いることが判明した。

この結果から、概ね、高齢者は子どもとの交流でエンパワメントされるが（その意味では幼老統合ケアの効用が証明されたが）、一部の高齢者にとってはマイナス効果をもたらすことから、幼老統合ケアは、高齢者の生活状況、心身状態、特性などを見極めた上で実践していくべきであることが明らかになった。また、フィールドワークや聞き取り調査から、高齢者がかまどでのご飯炊きや整理整頓など得意なこと（昔取った杵柄）を施設職員に代わりに行うことにより、施設としては相当の経済的効果が出るということがわかった。

② 特定の学区における高齢者と子どもとの

世代間交流（学びと遊び）

大学周辺の地域社会において、地域の主任児童委員、自治会、社協の協力のもと、学童保育（いきいき放課後事業）や学区の小学生等と、地域の高齢者によって月 2～3 回、約 3 年間、合計 55 回の世代間交流実践（※関係する実践の総計は 120 回程）を行った。その結果、次のような知見が得られた。

通算 55 回実施された多世代交流会のうち、その約 2/3 に参加していた高齢者（14 名）にとって、とりわけ、やりがいのあるプログラムは、子どもとの料理づくりと、地域のカルタ作りであることが判明した。なかでも、カルタ作りは継続的で時間を要する課題であるため、普段つきあいのない高齢者同士に親密な関係が生まれたことは思いもかけない成果であった。本実践では、それ以外にも、高齢者による回想法を用いた昔語り、絵本の読み聞かせ、紙芝居、手作り玩具、科学実験、おりがみ遊び等の伝承遊び、女子児童を対象としたお人形遊びやドールハウスを用いたごっこ遊び等々、様々な教材・教具（仕掛け）を用いて実践したが、高齢者からすると、これらの伝承遊びは、“一方的に子どもに教えている”という意識が強く、高齢者主導になりがちであり、子どもと相互交流している実感が低かった（実践後のインタビュー調査に基づく）。つまり、伝承遊びは、「遊び」としてよりも、「勉強」として子どもたちに受容されていることから、今後の世代間交流プログラムの開発においてその点に留意しなければならない。

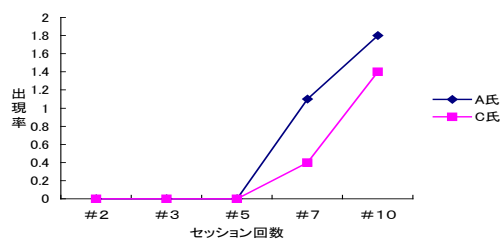
それに対して、高齢者及び子どもにとってとりわけ好評であったプログラムは、両者への調査の結果、複食（子ども世代、高齢者世代、親世代が各々自分の好む料理を独自の素材を用いて作り、そのつくった料理を互いに食べ合う実践）であることが判明した。

③病院における認知症高齢者を対象とする
継続的な幼老統合ケアの実践とその成果

認知症高齢者を対象とする幼老統合ケア（多世代交流）は、臨床心理士の教員が主になって約3年間、回想法を中心とする継続実践・研究をK病院で行った結果、多くの成果が得られた。その代表的な1つは次の通りである（ごく一部の研究成果を下記に示す）。

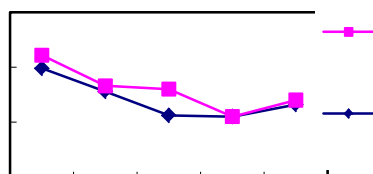
グラフ4のように、10回連続の幼老統合ケアの結果、とりわけ、A・Cの2名に関して改善の表れと考えられる「統合的回想」が見出された。ただ、この2名は別に実施した個人単位での回想法でも顕著な効果を挙げていることから今回の結果は当然の帰結であった。

グラフ4 A・Cの統合的回想の変化



むしろ、今回のグループ回想法で顕著な改善が見られたのは、グラフ5のように、認知機能障害の重篤さや人生への志向性の希薄のため、個人の内面への深まりがないB・Dの2名が、グループの展開に伴って、「聴き役」や「グループの進行を促す役」といった役割を見出すことにより、社会的・対人関係的な方向への進展が見られ、そのことがこの2名の改善につながったことである。

グラフ5 A・Cの相槌と肯定的反応の変化



そのことは、幼老統合ケアの枠組みのもと、

高齢者同士のかかわりがいかに重要であることを示している。ただその一方で、Eのように、参加者の認知機能、生活背景、特性によっては、回を追うごとに、グループの進行に参加することが難しくなるなど、対人交流を促すといったグループ回想法の利点を生かし切れない場合もあることが示唆された。

(3)マクロ・スケール

「おも路地」に集う大人には、1) 保護者、2) ボランティア、3) 地域住民や観光客という3タイプがあることが判明し、「なぜ『おも路地』に来ているのか」を彼らにインタビュー調査したところ、次の知見が得られた。

1) 保護者からは、「自分の子どもが通うから」という回答が最も多く、次に「友達を通して、自分も一緒に来た」「駄菓子屋のおばちゃんと会話できるから」であった。特に、「駄菓子屋のおばちゃんは、子育ての先輩なのでよく話を聞いてもらっている」という子育て支援の面も担っていた。それはストレス解消となり得る。2) ボランティアからは、「楽しいから」「子どもが好きだから」「シニアの方と親しくなれるから」という回答が多くかった。特に、「いい加減」にかつ「自発的に」活動できるところに、「おも路地」の魅力を感じている者が大半であった。3) 地域住民や観光客からは、「たまたま通りかかって立ち寄ってみた」「懐かしいと感じた」など、一時的な興味を持って覗いたという回答が得られた。また、「平野マップを見て、楽しそうだと思ったから」という観光客もいた。その理由は、「おも路地」及びH区には駄菓子屋や路地、各種の“博物館”といった普段見られない、昔懐かしい空間が多々存在するからである。このように、集う理由は三者三様であるが、すべてに共通しているのは、集う理由として「おも路地」の楽しさ、良い意味でのいい加減さ（寛容さ）が

見られることであり、それは、世代間交流の原点であることが判明した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

- ① 中井孝章、幼老統合ケアに基づく多世代交流の実践と現在—共生ケアの構築に向けて—、関西教育学研究年報、査読有、32、2009、pp.100-105
- ② 福島カヤ子・中井孝章、多世代交流実践の活動内容と各世代に及ぼす意義—大阪市苅田南地区での実践活動を中心に—、関西教育学研究年報、査読有、32、2009、pp.87-92
- ③ 中井孝章、「空間的思考」の立場からみた子どもの居場所と多世代交流空間の創出、日本教育方法学会研究集会報告、査読有、13、2009、pp.4-15
- ④ 原田智子、篠田美紀、他、回想法の生涯学習プログラムへの応用に向けて、大阪市住まいのミュージアム研究紀要、査読有、7、2009、pp.21-30
- ⑤ 篠田美紀、原田智子、他、回想によるエネルギーが生活の幅を広げていく、おはよう 21、査読無、2009、52-55
- ⑥ 中井孝章、子どもの自己承認欲求と親からの期待と承認の関連性、生活科学研究誌、査読有、23、2008、pp.113-137
- ⑦ 中井孝章、テリトリー形成能力からみた子どもの居場所、生活科学研究誌、査読有、5、2007、pp.213-241
- ⑧ 中井孝章、「食卓の絵」を通してみる現代の子どもの家族関係、生活科学研究誌、査読有、5、2007、pp.189-211
- ⑨ 篠田美紀、「懐かしの間」を活用したグループ回想法の試み、日本老年社会科学、査読有、29-3、2007、pp.403-411
- ⑩ 篠田美紀、高齢期の心を知る—思い出話の力の不思議—、児童・家族相談所紀要、査読有、23、2007、pp.37-42

[学会発表] (計 4 件)

- ① 原田智子、篠田美紀、The Effects of Group Reminiscence for Elderly People with Alzheimer-Type Dementia、International Reminiscence and Life Review Conference、2009年10月20日、Atlanta,GA(USA)
- ② 中井孝章、福島カヤ子、多世代交流による共生ケアの創造、関西教育学会、2008年11月9日、大阪教育大学
- ③ 福島カヤ子、中井孝章、多世代交流実践の活動内容と各世代に及ぼす意義—大阪市苅田南地区での実践活動を中心に—、2008年11月9日、大阪教育大学
- ④ 篠田美紀、他、軽度アルツハイマー型認知

症高齢者を対象としたグループ回想法の効果検証、日本認知症ケア学会、2007年10月12日、マリオス・盛岡市民文化ホール・岩手県民情報交流センター

[図書] (計 6 件)

- ① 中井孝章、日本教育研究センター、ケア学の転回、2009、241
- ② 中井孝章編著、大阪公立大学共同出版会、世代間交流の理論と実践、2009、84
- ③ 中井孝章、大阪公立大学共同出版会、子どもの居場所と多世代交流空間、2009、71
- ④ 中井孝章、三学出版、(連)のナラティブ—〈他者〉と出会う技法—、2008、101
- ⑤ 中井孝章編著、川口良仁・小伊藤亜希子、大阪公立大学共同出版会、街づくりと多世代交流、2008、72
- ⑥ 中井孝章、日本教育研究センター、子ども学入門、2008、246

6. 研究組織

(1)研究代表者

中井 孝章 (NAKAI TAKAAKI)
大阪市立大学・大学院生活科学研究科・教授
研究者番号：20207707

(2)研究分担者

松島 恭子 (MATSUSHIMA KYOKO)
大阪市立大学・大学院生活科学研究科・教授
研究者番号：20132201

篠田 美紀 (SHINODA MIKI)
大阪市立大学・大学院生活科学研究科・准教授
研究者番号：10285299

長濱 輝代 (NAGAHAMA TERUYO)
大阪市立大学・大学院生活科学研究科・講師
研究者番号：40419677

三船 直子 (MIFUNE NAOKO)
大阪市立大学・大学院生活科学研究科・准教授
研究者番号：30336029

小伊藤 亜希子 (KOITO AKIKO)
大阪市立大学・大学院生活科学研究科・准教授
研究者番号：90257840

清水 由香 (SHIMIZU YUKA)
大阪市立大学・大学院生活科学研究科・助教
研究者番号：90336793

(3)連携研究者

なし